

雌阿寒岳の火山活動解説資料（令和8年3月）

札幌管区气象台
地域火山監視・警報センター

8日にポンマチネシリ96-1火口でごく小規模な噴火が発生しました。同火口周辺の雪面にみられた火山灰の状況も踏まえると、この噴火を含め6日夜から15日昼頃の間には複数回の噴火が発生したとみられます。

ポンマチネシリ火口付近では、2025年9月12日から観測されている火口方向が上がる傾斜変動が緩やかに続いており、火口付近浅部は引き続き膨張した状態と考えられます。また、96-1火口の噴煙活動は活発な状態が続いています。

火山活動の高まった状態が続いており、ポンマチネシリ火口から約500mの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

ポンマチネシリ火口から約500mの範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

令和7年9月15日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2：火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○活動概況

- ・噴気など表面現象の状況（図2、図3、図4-①、図8-①②⑤、図9-①③、図11-①～⑥）

8日09時15分頃にポンマチネシリ96-1火口でごく小規模な噴火が発生しました。同日16時頃にかけて断続的に灰白色の噴煙がみられ、最高で火口縁上200mまで上がりました。この噴火による大きな噴石の飛散は確認されませんでした。この噴火の発生時には、既に96-1火口周辺の雪面に火山灰と考えられる噴出物が付着していたことから、気象条件の影響により同火口付近の状況が不明であった6日夜から8日朝までの間にもごく小規模な噴火が発生したと考えられます。また、同様に雪面の状況から、11日から15日昼頃までの間にもごく小規模な噴火が発生したと考えられます。

ポンマチネシリ96-1火口では、2025年9月12日以降、噴煙の量の増加した状態が続いています。今期間も最高で火口縁上600mまで上がるなど、引き続き活発な状況です。

その他の各火口の噴気の高さ（いずれも火口縁上の高さ）は、赤沼火口では200m以下、北西斜面06噴気孔列では100m未満、中マチネシリ火口では400m以下で経過し、噴気活動は低調な状態です。

- ・火山ガスの状況（図4-②）

9日に雌阿寒岳山麓で実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり約300トンで、前回の観測（2月18日、1日あたり約300トン）と同程度でした。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図10mメッシュ（火山標高）』、『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和8年4月分）は令和8年5月13日に発表する予定です。

・ポンマチネシリ96-1火口周辺の全磁力の状況（図9-②④）

全磁力連続観測では、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙が増加した2025年9月12日以降、96-1火口付近の地下の熱活動の高まりを示唆する全磁力値の減少がみられ、その後も緩やかな減少傾向が続いています。

・地震及び微動の発生状況（図4-④⑤、図5～7、図8-④⑦、図11-⑦⑧）

2月末から3月中旬にかけて、ポンマチネシリ火口付近で振幅が小さい火山性微動を時々観測しました。このうち、1日21時11分頃から観測された微動は約5分間継続し、発生以降にポンマチネシリ火口付近の火山性地震が一時的にやや増加しました。

ポンマチネシリ火口付近の火山性地震は、2025年9月中旬に増加したのち、10月頃以降は概ね少なく経過していますが、増加前と比べてやや活発な状態が続いています。

震源はポンマチネシリ火口付近のごく浅い所～深さ0km付近、中マチネシリ火口付近の深さ1km付近に分布しました。

・地殻変動の状況（図4-③、図6、図8-③⑥⑧、図10、図12）

ポンマチネシリ火口近傍の阿寒富士北2観測点では、2025年9月12日以降、火口方向が上がる傾向の緩やかな変動が継続しており、ポンマチネシリ火口浅部は膨張した状態と考えられます。2月末から3月中旬に観測された火山性微動と同時期、あるいは直後にはごくわずかな傾斜変動が観測されました。

GNSS連続観測によると、主に東側山麓の観測点で2025年8月末頃から山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸長が観測されています。

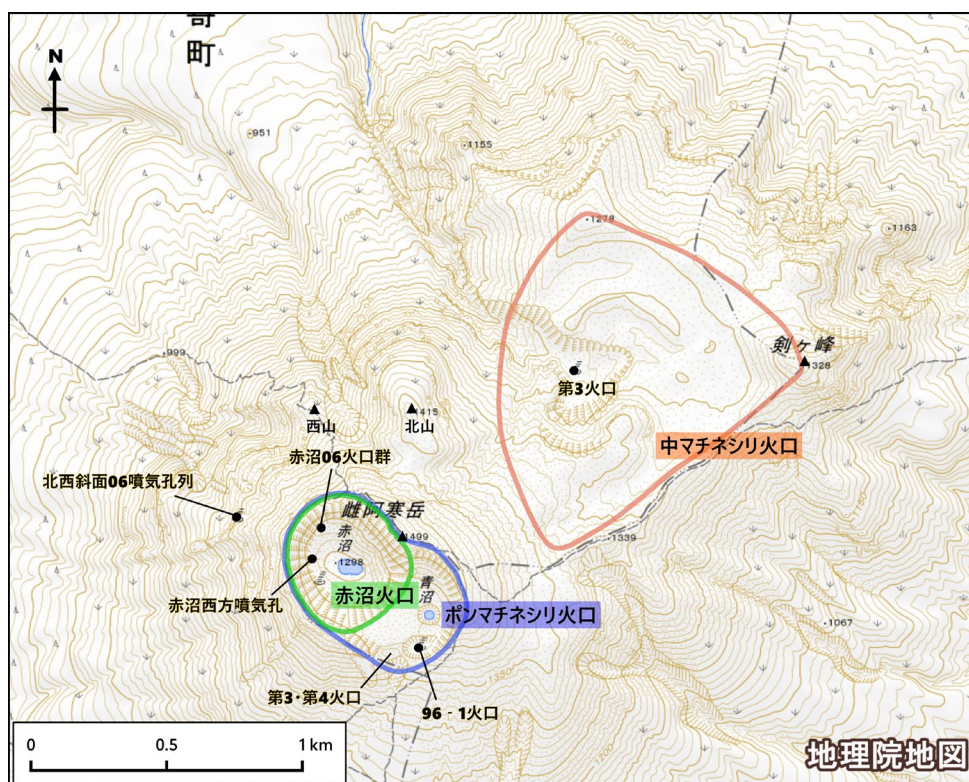


図1 雌阿寒岳 火口及び噴気孔の位置図

各火口の火口縁は、概ねの範囲を示すものです。

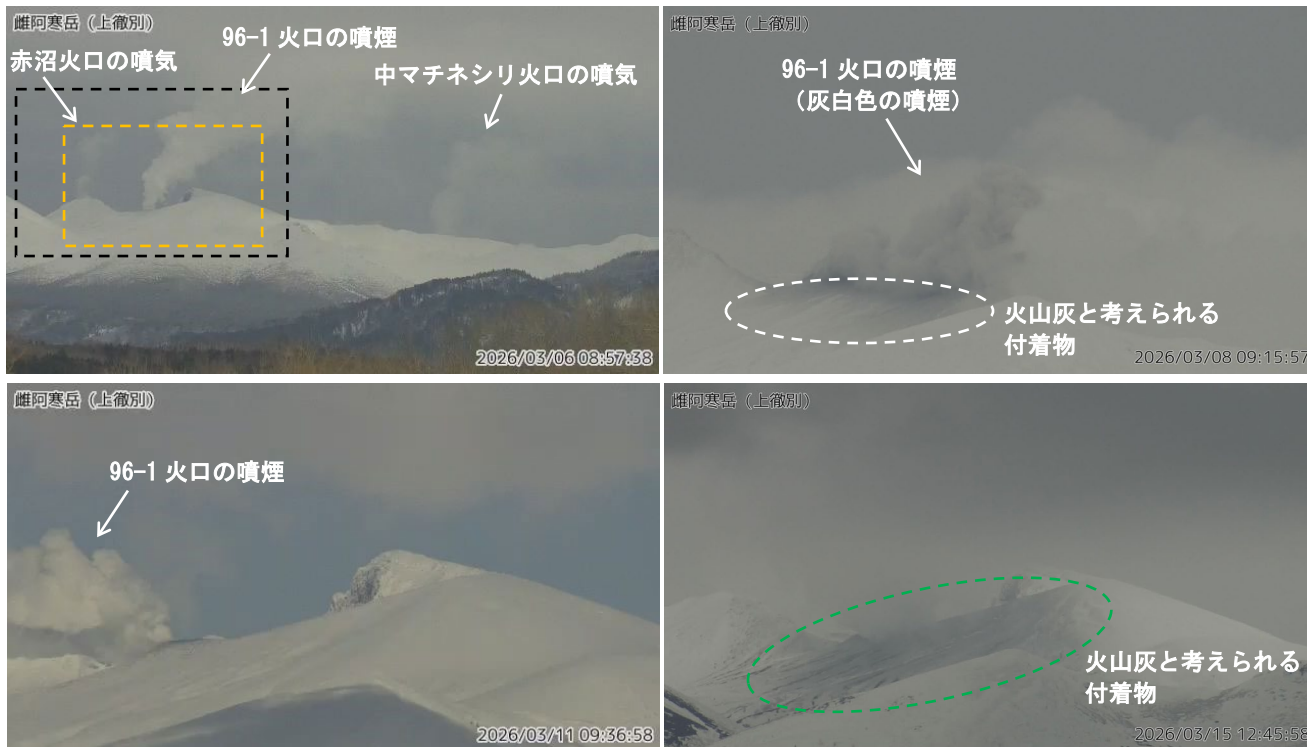


図2 雌阿寒岳 ポンマチネシリ 96-1 火口のごく小規模な噴火の状況（^{かみてしべつ}上徹別監視カメラによる（雌阿寒岳の南東側から））

- ・ 上段右図は上段左図の黒破線内、下段図は黄色破線内を拡大したものです。
- ・ 3月8日09時15分頃から、ポンマチネシリ 96-1 火口でごく小規模な噴火が発生し、灰白色の噴煙が最高で火口縁上の高さ約200mまで上がりました。噴火は同日16時頃まで継続しました。また、この噴火の発生前から、ポンマチネシリ 96-1 火口周辺の雪面に火山灰と考えられる付着物（白破線内）が認められていました。
- ・ 11日9時頃（下段左図）には6日夜から8日に噴出したと考えられる火山灰が積雪に覆われましたが、15日には再び火山灰と考えられる付着物（緑破線内）が認められました。11日から15日昼頃の間にも、ごく小規模な噴火が発生したと考えられます。



図3 雌阿寒岳 各火口、噴気孔の噴気（噴煙）の状況

- 左：^{かみてしべつ}上徹別監視カメラによる（雌阿寒岳の南東側から）
- 右：オンネトー展望台（道）監視カメラによる（雌阿寒岳の西側から）
- ・ 96-1火口の噴煙は、2025年9月12日以降増加し、その後も活発な状態が続いています。

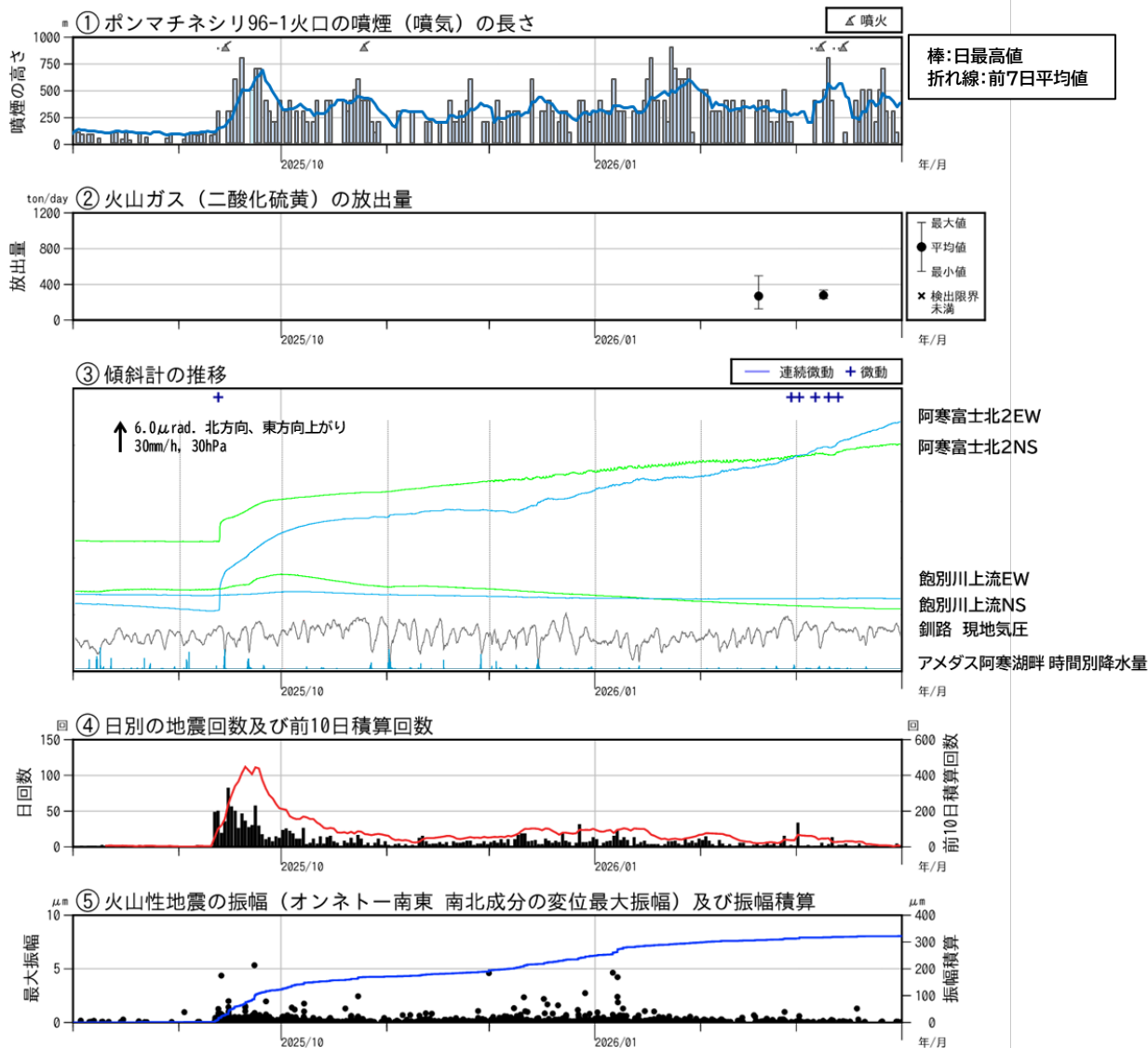


図4 雌阿寒岳 傾斜変動の推移及び火山性地震の発生状況（2025年8月～2026年3月）

- ・ ①の噴気の長さについては図9の説明図を参照ください。
- ・ ③の傾斜計データは降水や気圧変動の影響と考えられる変動が含まれています。
- ・ 2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。3月6日夜から8日朝の間、11日から15日昼頃の間にもそれぞれ噴火が発生したと考えられます。
- ・ 期間内に発生した火山性地震はポンマチネシリ火口付近の浅部で発生したものが多数を占めています（図7参照）。
- ・ 2月末から3月中旬にかけて振幅の小さな火山性微動が時々発生し、3月8日朝にポンマチネシリ96-1火口でごく小規模な噴火の発生を観測したほか、6日夜から8日朝の間、11日から15日昼頃の間にもごく小規模な噴火が発生したと考えられます。
- ・ 2月18日、3月9日に実施した現地観測での火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、いずれも1日あたり約300トンでした。
- ・ 2025年9月12日の火山性微動に伴い主に阿寒富士北2観測点でポンマチネシリ火口方向が上がる傾斜変動が観測され、以降、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙活動が活発です。
- ・ 10月頃以降も阿寒富士北2観測点で緩やかな火口方向上がりの傾斜変動が続いており、2025年12月頃から変動方向にわずかな変化がみられています。
- ・ 地震活動は、2025年10月頃以降は概ね少なく経過していますが、2025年9月の活発化前と比べてやや活発な状態が続いています。

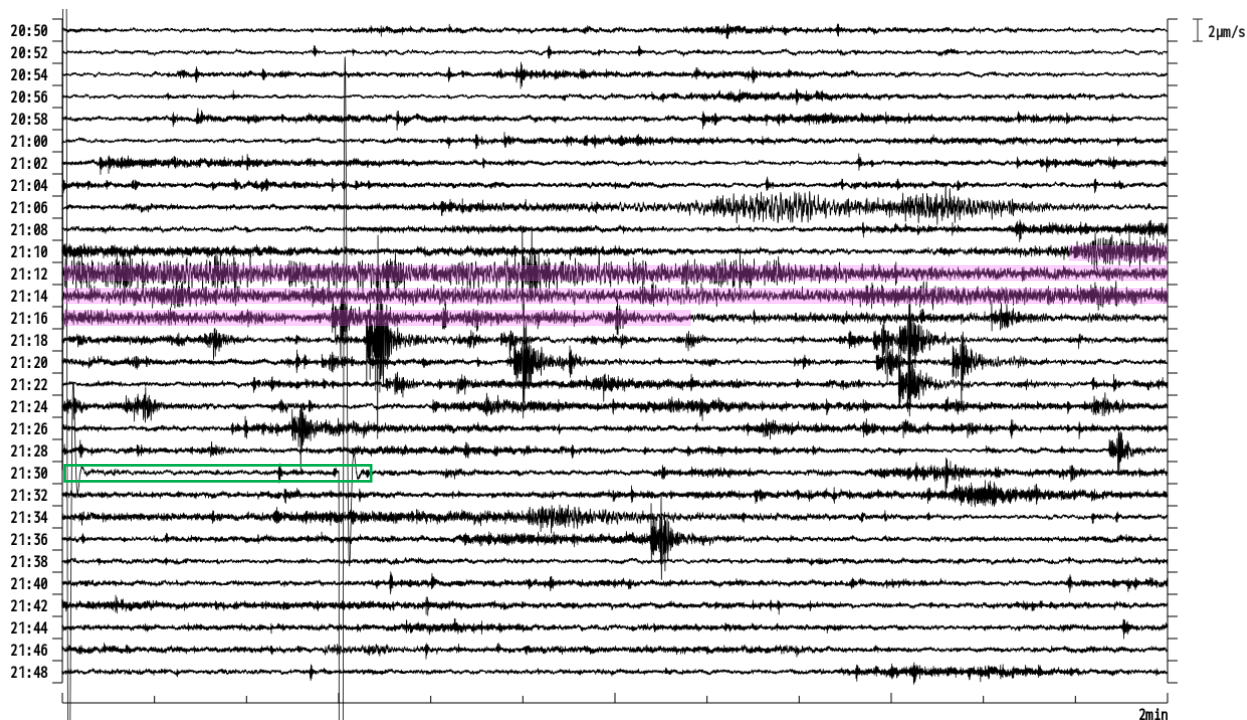


図5 雌阿寒岳 オンネトー南東観測点の速度波形 上下成分
(1日20時50分~21時50分)

波形中の桃色のハッチ (■) は火山性微動が継続した時間を示します。
波形中の緑四角 (□) は検定信号です。

- ・ 1日21時11分頃から振幅が小さく継続時間が約5分の火山性微動が発生し、その後、ポマチネシリ火口付近の地震が一時的にやや増加しました。

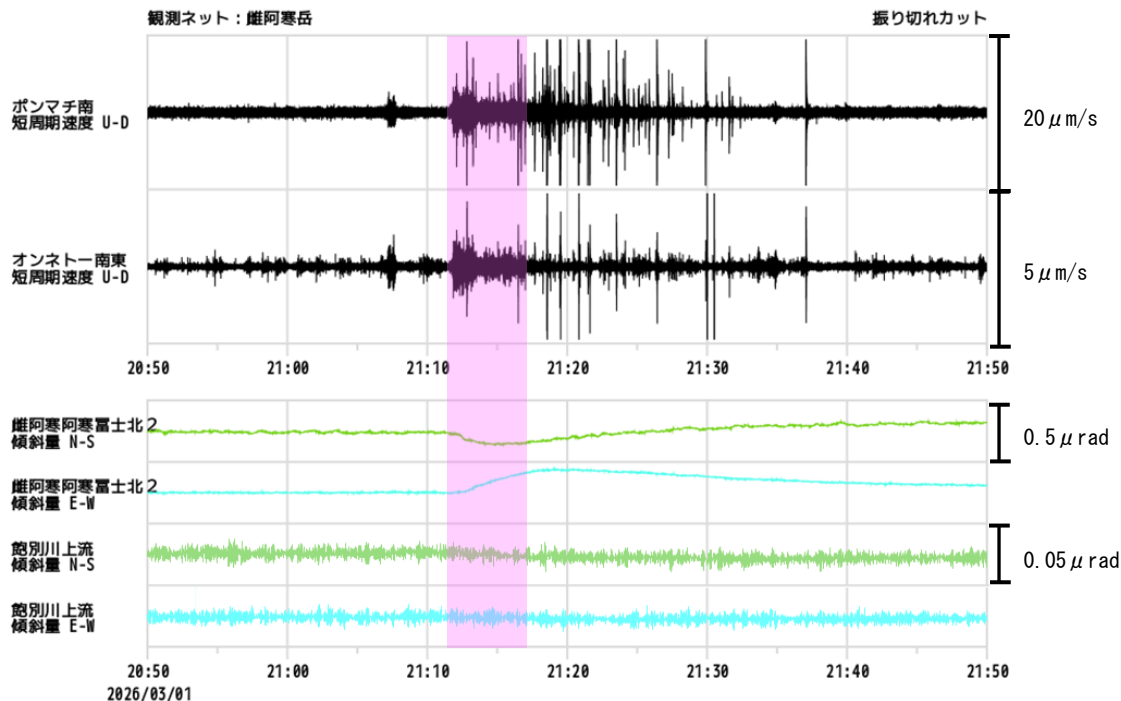


図6 雌阿寒岳 1日21時11分頃に発生した火山性微動と傾斜変動
(1日20時50分~21時50分)

各地震波形は100Hzデータ、傾斜波形は1Hz(秒値)データの推移です。鮑別川上流の傾斜計データはトレンド補正を行っています。

波形中の桃色のハッチ (■) は火山性微動が継続した時間を示します。

- ・ 1日21時11分頃からの火山性微動及び火山性地震の一時的なやや増加に伴い、ポマチネシリ火口近傍の阿寒富士北2傾斜計ではわずかな傾斜変動を観測しました。

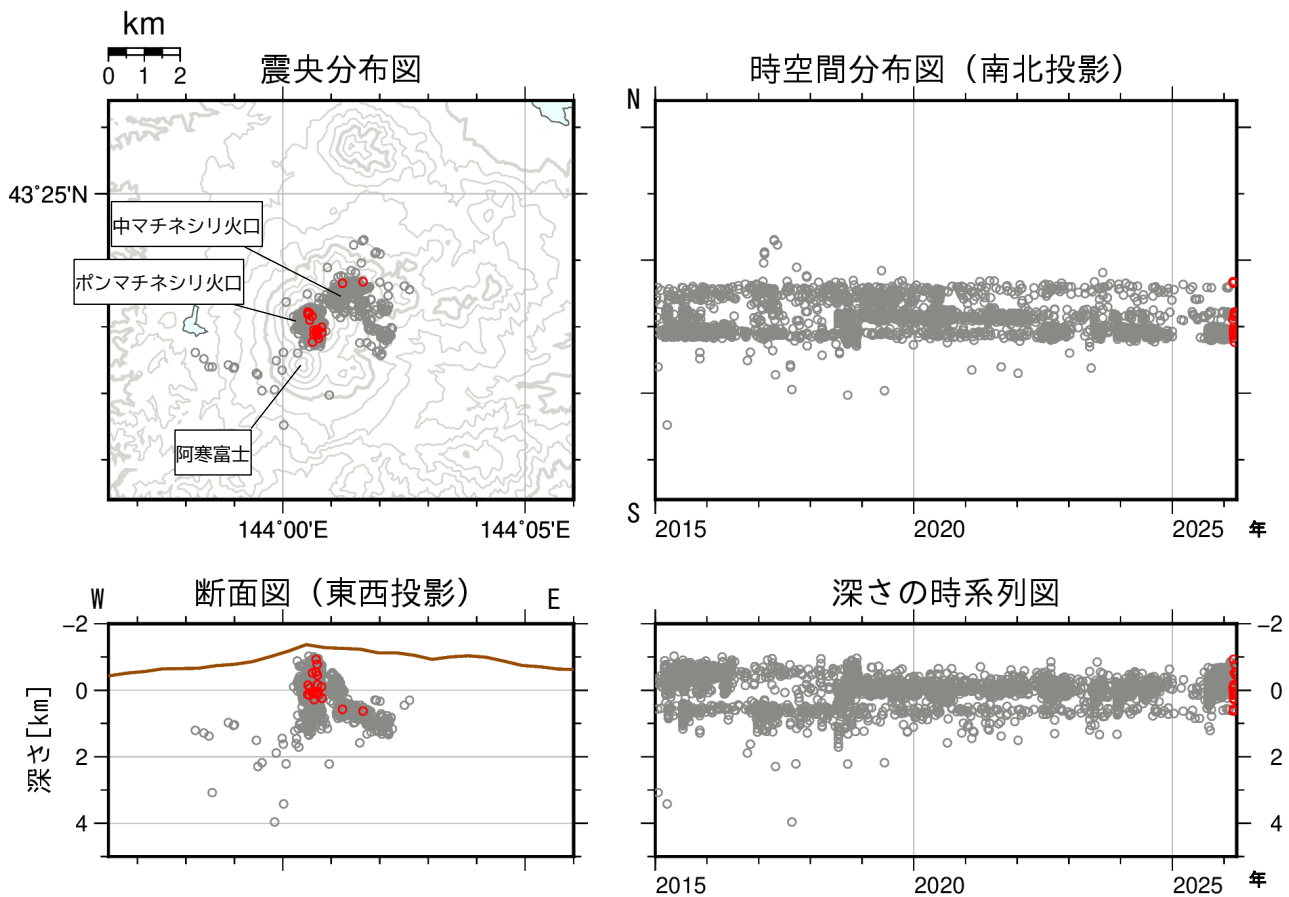


図7 雌阿寒岳 火山性地震の震源分布（2015年1月～2026年3月）
 ○：2015年1月～2026年2月の震源 ●：2026年3月の震源

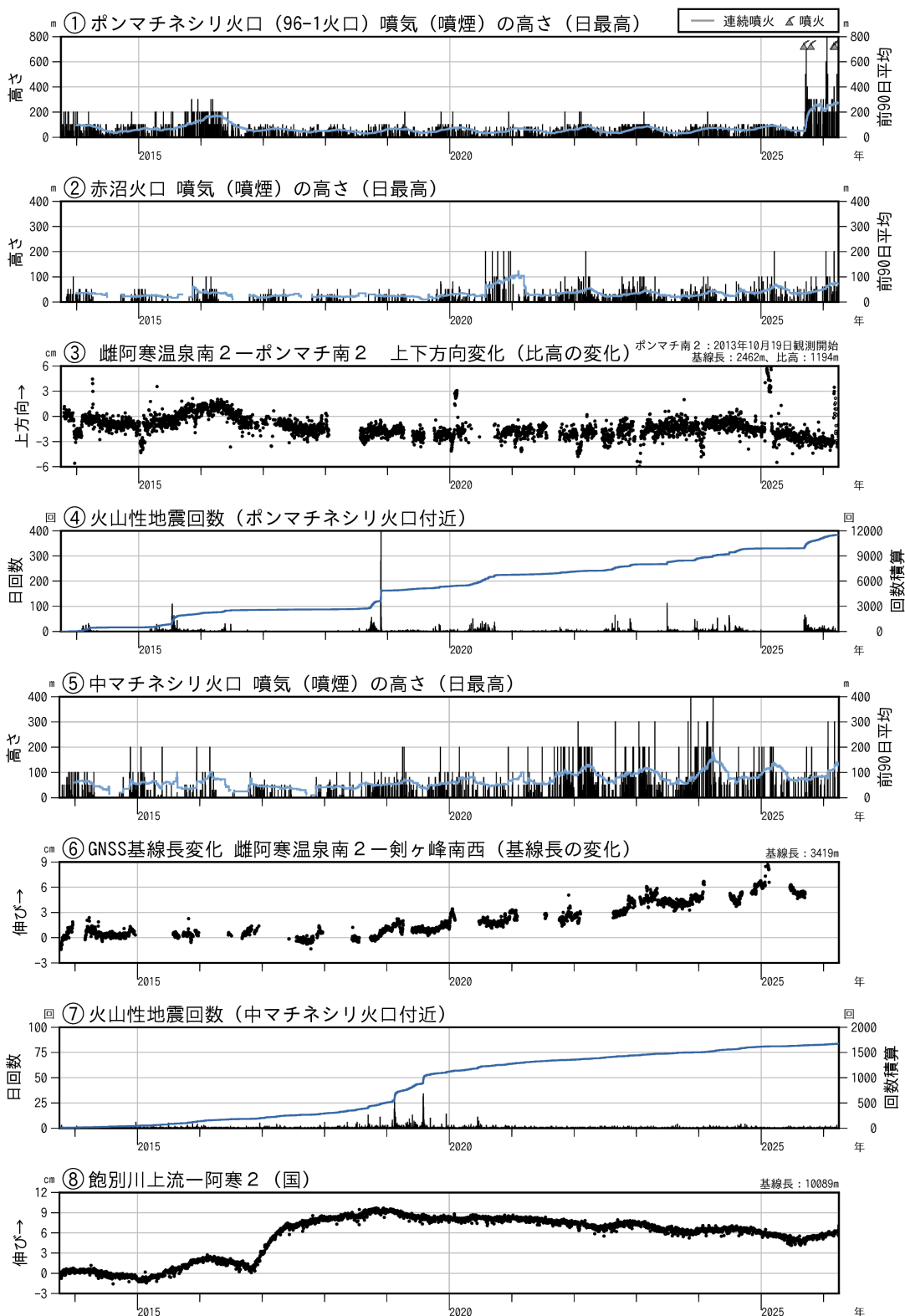


図8 雌阿寒岳 火口別の活動経過図（2013年10月～2026年3月）

- ・各火口の位置は図1を参照してください。
- ・グラフ③、⑥、⑧は、それぞれGNSS連続観測の基線図（図12）基線④、⑦、⑨に対応しています。
- ・グラフ④、⑦の回数は、雌阿寒岳付近で発生したと計数した地震のうち、発生領域が明瞭に識別出来たもののみを計数しています。
- ・ポンマチネシリ火口付近の地震活動は、2025年9月の活発化前と比べてやや活発な状態です。また、96-1火口の噴煙の高さは、2025年9月12日以降、高い状態が続いています。
- ・中マチネシリ火口付近の活動状況を示唆する観測データに特段の変化は認められていません。

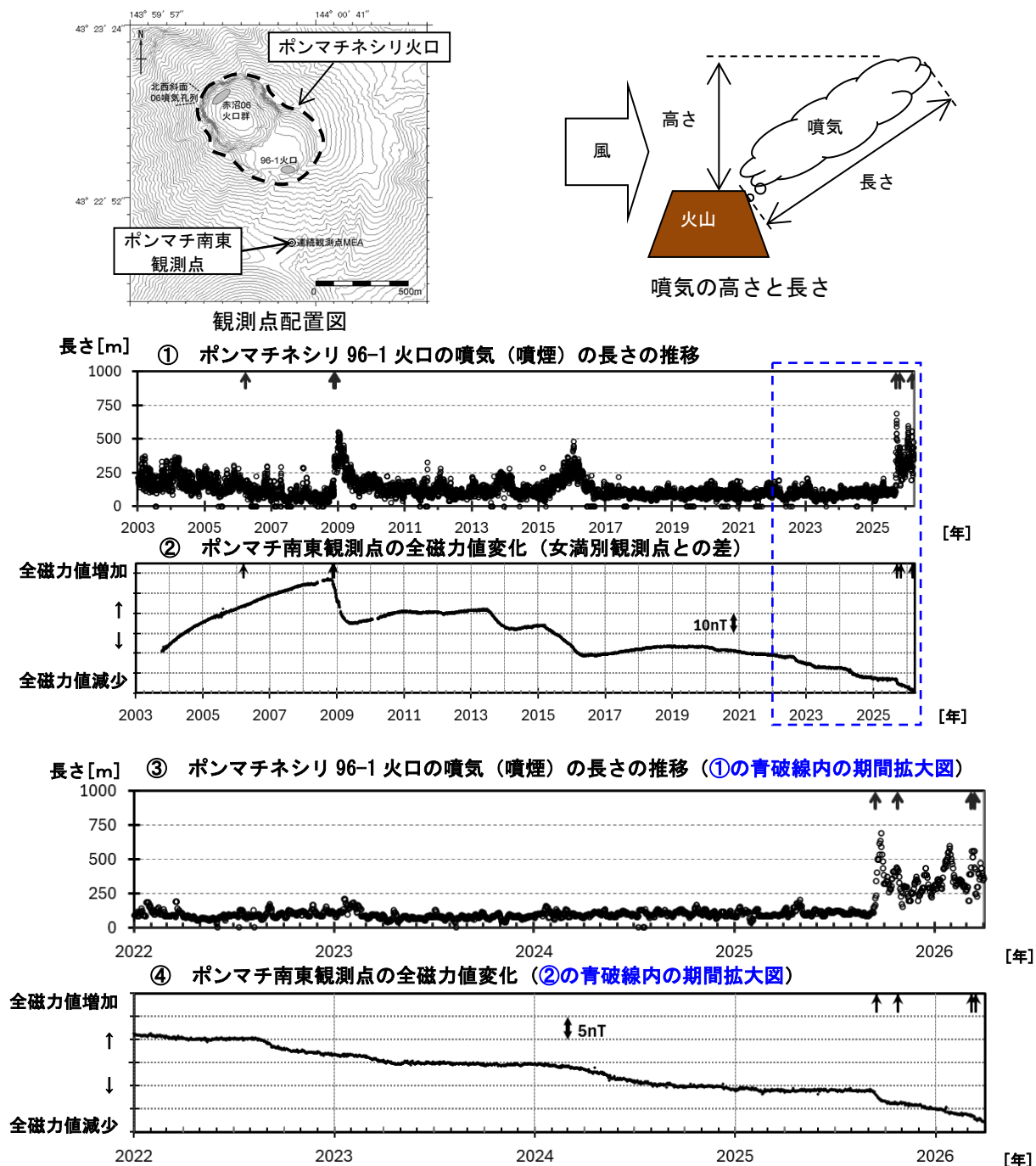


図9 雌阿寒岳 ポンマチネシリ96-1火口の噴気（噴煙）の長さおよび全磁力値の経過及び全磁力観測点配置図（2003年～2026年3月）

- ・①③のグラフに示す噴気の長さは気温の影響を受けることから（気温が低いと噴気は長くなり、高いと短くなる傾向がある）、気温補正後の値をプロットしています。
- ・②④のグラフに示す全磁力値は、地磁気観測所女満別観測施設との全磁力値差をプロットしており（表示開始は2003年10月16日）、空白部分は欠測を示します。
- ・図中の↑は噴火を示します。ただし、2006年の噴火は赤沼火口からの噴火です。また、2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- ・96-1火口の噴煙の長さは2025年9月12日以降増大しています。活発な状態が続く中で、盛衰がみられています。
- ・96-1火口南側のポンマチ南東観測点で、2025年9月12日以降、96-1火口近傍の地下における熱活動の活発化を示すと考えられる全磁力値の減少がみられ、10月以降も緩やかに継続しています。また、2月末から減少率にわずかな増大が認められます。中長期的には、2020年頃から全磁力の緩やかな減少がみられています。

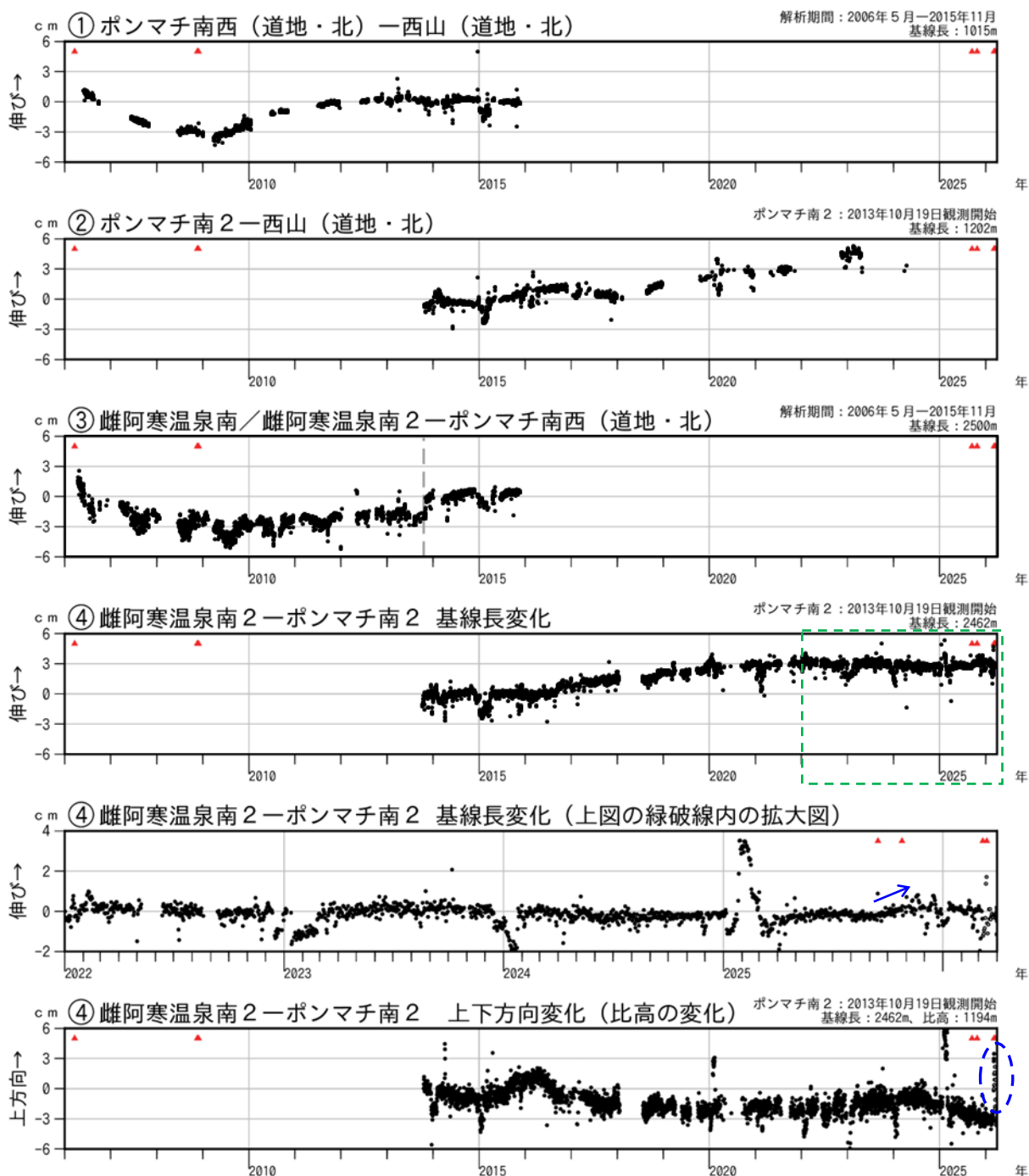


図10-1 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長及び比高の変化（2006年4月～2026年3月）

- ・ グラフ①～④はGNSS連続観測の基線図（図12）の基線①～④に対応しています。
- ・ ▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・ ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線②は①、基線④（基線長）は③と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・ 基線③の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・ グラフ④は基線④の基線長と比高を別個に描画しています。比高は雌阿寒温泉南2からみたポンマチ南2の上下方向の動きを表しています。
- ・ 冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります（基線④の直近にみられる変化（青破線内）もこれの影響を含みます）。
- ・ 基線④（基線長）では、2025年9月中旬から11月頃にかけてごくわずかな伸長（青矢印）が認められましたが、その後、特段の変化は認められません。

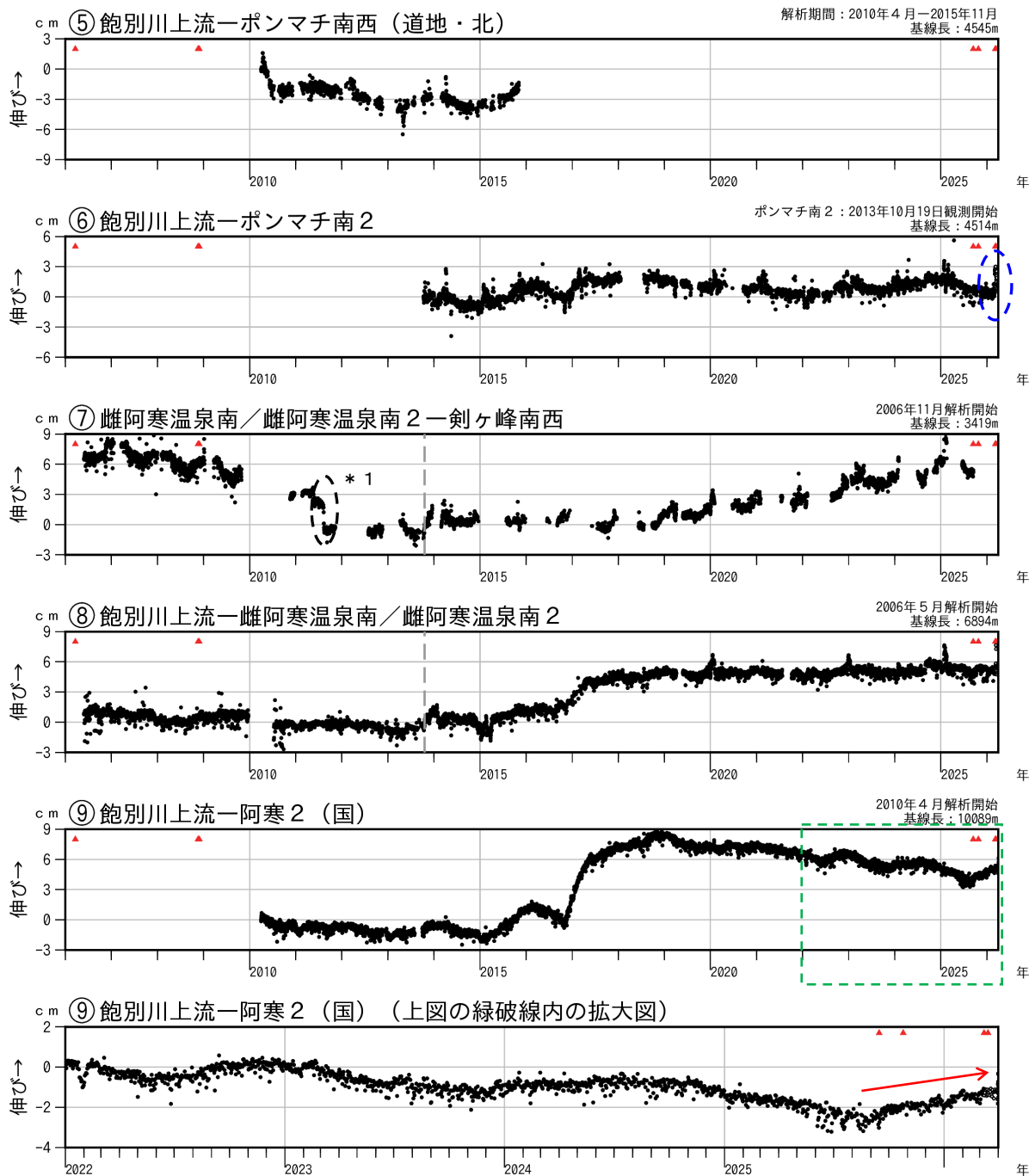


図10-2 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長の変化（2006年4月～2026年3月）

- ・ グラフ⑤～⑨はGNSS連続観測の基線図（図12）の基線⑤～⑨に対応しています。
- ・ ▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・ * 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。
- ・ ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線⑥は⑤と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・ 基線⑦⑧の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・ 冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります（基線⑥の直近にみられる変化（青破線内）もこれの影響を含みます）。
- ・ 南東及び北東山麓の観測点を含む組み合わせの基線⑨では、2025年8月末以降、伸長傾向（赤矢印）が認められます。
- ・ 基線⑦では2019年頃から中マチネシリ火口付近浅部の膨張を示唆するわずかな伸長傾向が認められます。

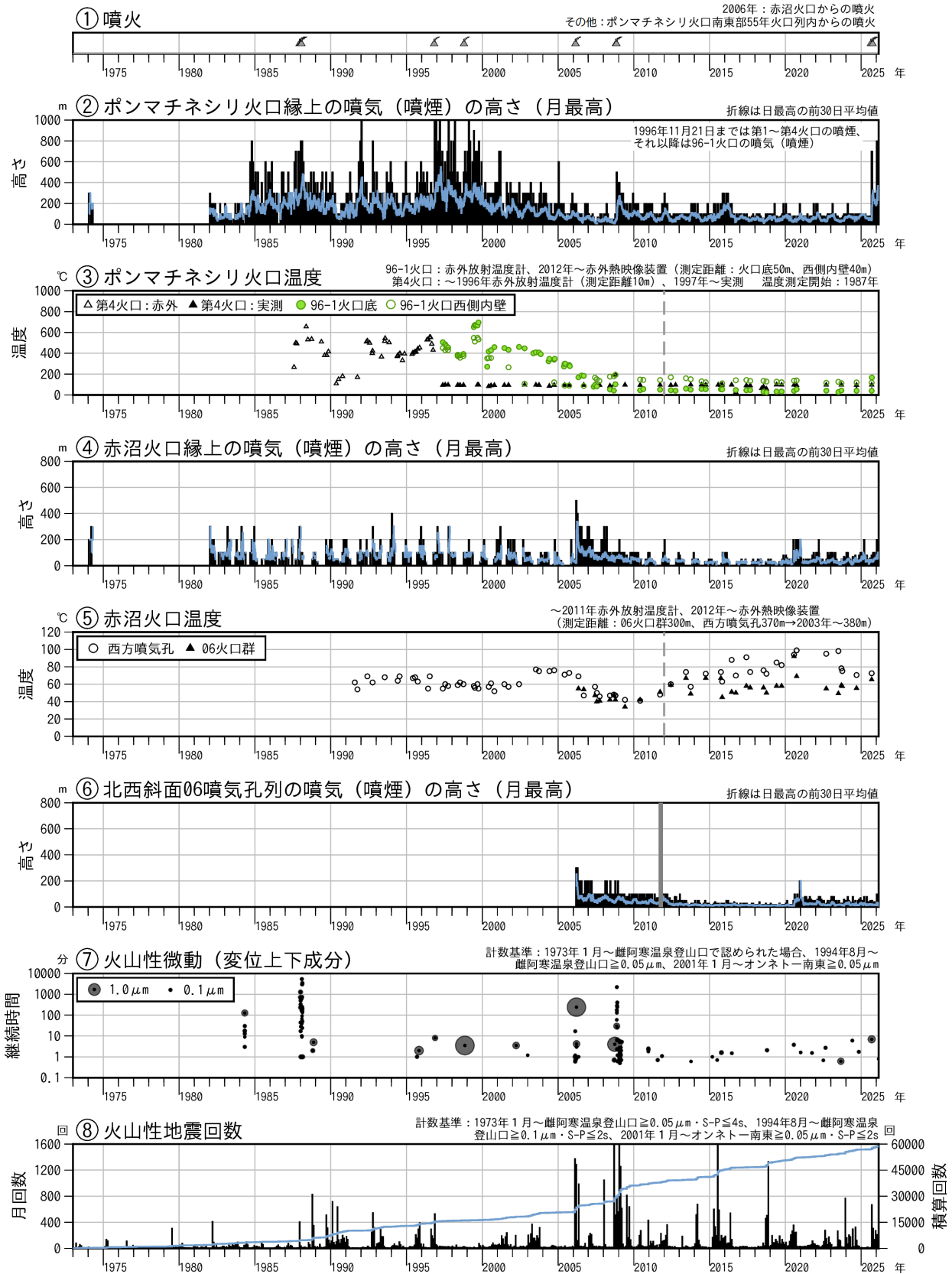


図11 雌阿寒岳 火山活動経過図（1973年1月～2026年3月）

- ・ ③：各火口温度は北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを含みます。
- ・ ③⑤：測定機器の変更により、2012年（破線）前後では測定温度に差が生じている可能性があります。
- ・ ⑥：灰色部分は機器障害による欠測を示します。
- ・ 各火口の位置は図1を参照してください。

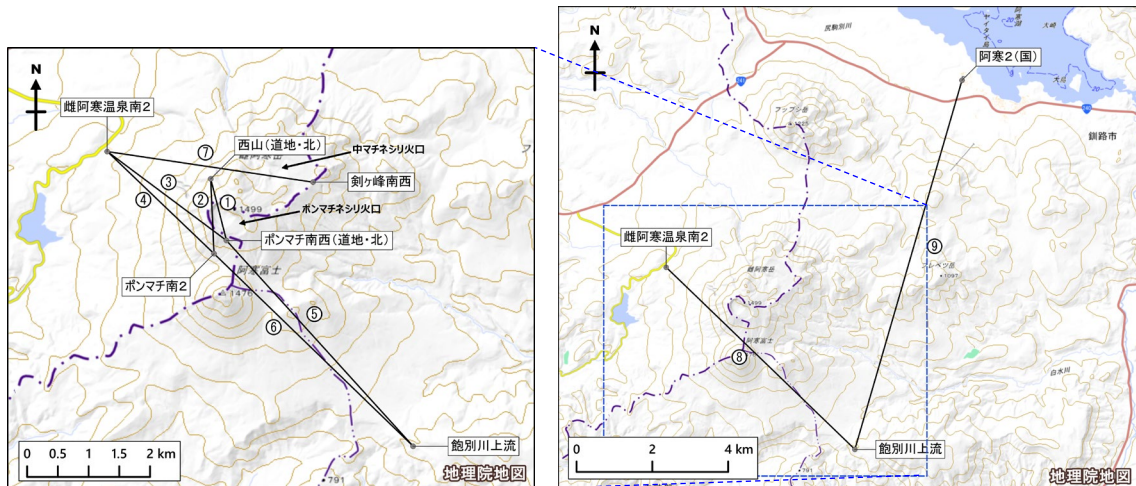
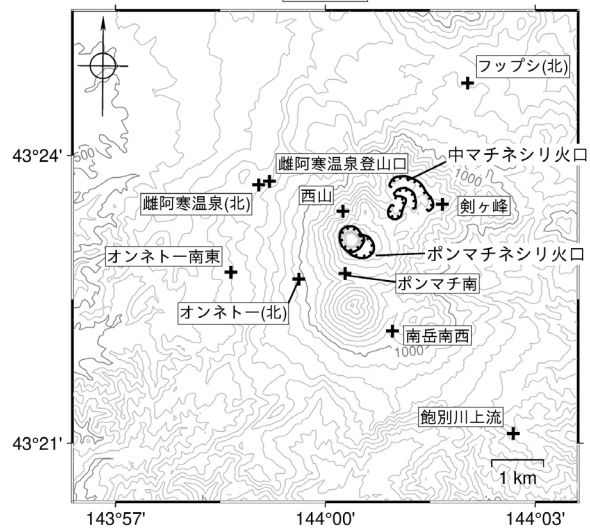
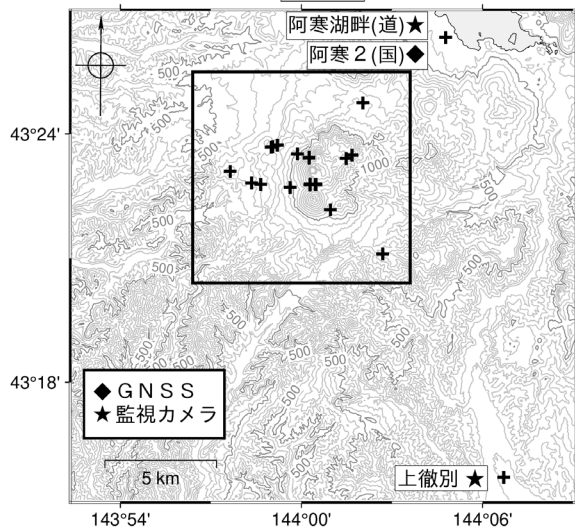


図12 雌阿寒岳 GNSS連続観測の基線図

- ・基線①～⑨は、図10のグラフ①～⑨に対応します。
- ・基線④、⑦、⑨は、それぞれ図8のグラフ③、⑥、⑧に対応しています。

広域図

地震計



GNSS・傾斜計

空振計・監視カメラ

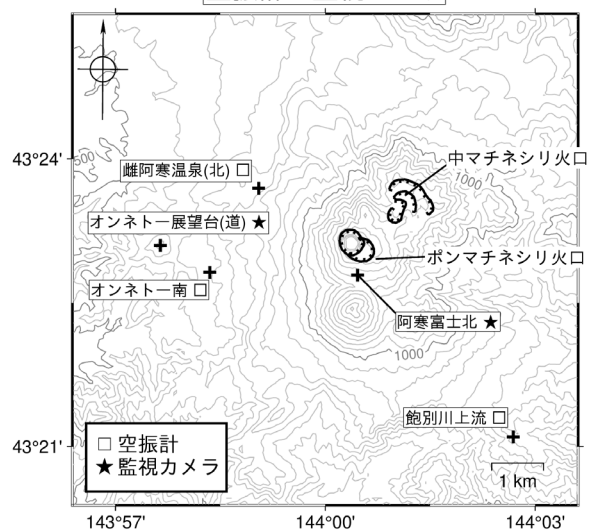
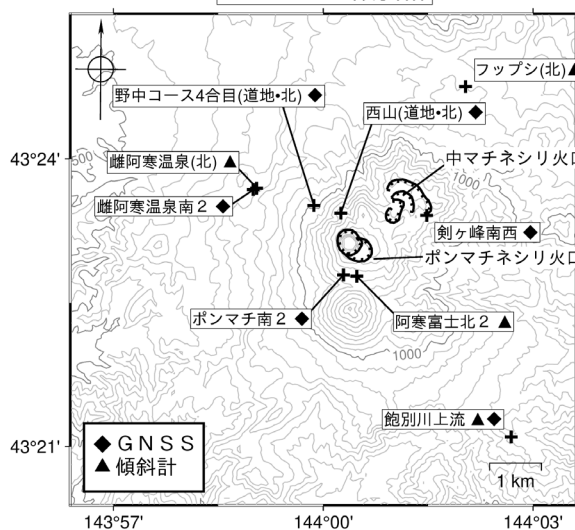


図13 雌阿寒岳 観測点配置図

各機器の配置図は広域図内太枠線で示した領域の拡大で、+印は観測点の位置を示します。気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

- (国) : 国土地理院 (北) : 北海道大学 (道) : 北海道
(道地) : 北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所